（別紙）４　研究の成果

Ⅰ　研究の実際

１　１年生の実践　　主題「集団生活の向上のために自己の責任を果たそう」

(1)　ねらい

集団生活の向上のために，感情に左右されることなく，自己の役割を知り，責任を果たしていこうとする気持ちを高める。

(2)　授業の展開　【道徳・指導過程の基本形を意識化，心のノートの活用】

価値の追求・把握の段階では，主人公のおかれた状況を確認し，主人公の１年生キャプテンとしての立場を認めながらも，上級生への話し合いに行けないでいる気持ちについて，「～と思いますか」という発問の仕方で話し合わせた。「発問は一発で決める」ということを意識して，生徒がじっくりと思っていることを引き出せるよう配慮した。次に，部活動に出なくなった主人公の気持ちと「わたしが言うわ。わたしの役だから」と言った主人公の気持ちをワークシートに書かせ，その後に話し合わせた。ここではワークシートに自分の考えを整理して書けるよう時間を確保したが，これは生徒には自分の考えをまとめて発表しやすくするために，教師には机間指導をして生徒の考えをつかむために有効であった。

価値の内面的な自覚の場面では，集団生活の向上のために自分の役割を果たした人についてワークシートに書かせて話し合わせた。ここでの発問は，「見たり聞いたりしたことがありますか。それはどんなことですか。その時どんな気持ちでしたか。」と，指導過程の基本形を意識して３段階の発問で行った。生徒からは「学校祭での練習で，先輩が熱心に演技を教えてくれた。すごいな」「部活動で叱られたとき，代表で謝ってくれた人がいた。安心した」「部活動のキャプテンは率先して声を出していてかっこいい」などたくさんの意見が発表され，自分たちの生活を振り返らせる機会になった。

まとめの場面では，これまでに引き受けた役割の中で大変だけど「よかった！」と思ったことを「心のノート」に書かせたところ，集団生活の向上のために自分が一生懸命やってきたが，まわりに支えられて一つの役割がうまくやり遂げられたことに気付き始める記述が見られた。

２　２年生の実践　　主題「人間として生きる喜びを味わおう」

(1)　ねらい

生きがいを求め，困難や自分の中にある弱さに負けずに，将来の夢に向かって着実に努力しようとする気持ちを高める。

(2)　単元構想（抜粋）

心のノート　　Ｐ.80～Ｐ.83
「かみしめたい
人間として生きるすばらしさ」
自分自身の生きがいや生きる喜びについて考えることで，生き方について目を向けるようにする。

→

道徳【3-(3)人間性への信頼，生きがい】
「在校生へのメッセージ」
生きがいを求め，困難や自分の中にある弱さに負けずに，将来の夢に向かって着実に努力しようとする気持ちを高める。

←

総合　　**「職場体験学習」**
地域の人とかかわり合いながら，自己の理解を深め，職業の実像をつかみ，望ましい勤労観，職業観を身につけようとする気持ちを高める。

(3)　授業の展開　【ＱＵの結果の分析，絵本の活用】

本学級の生徒の実態を調査するために，５月と 10 月にＱＵアンケートを実施した。その中で生徒 A は非承認群に属していたが，10 月には満足群に属していた。生徒Ａの心の変容を追うことで，総合単元的な道徳の授業を継続した観点から，授業の展開を振り返ってみたい。

５月に実施した道徳「愛されるデンさん」の授業では，道徳の授業に対してあまり積極的に参加することはできていなかった。勤労・社会奉仕にかかわる内容項目での授業であったが，ワークシートの記述を見ると，まだ働くことへの意識が低かった。

しかし，８月の職場体験学習で達成感のある３日間を過ごし，職場体験日誌に「３日目が一番充実していたので，別れる時はさびしいなと思いました」と書き込むなど，自己理解を深め，望ましい勤労観，職業観を身につけようとする気持ちが高まったことがうかがえた。

11 月に実施した道徳「人間として生きる喜びを味わおう」の授業で，「価値の内面的な自覚」の場面にワークシートを使用したが，生徒Ａは「職場体験の時，小さ

い子に絵本を読んであげた。ちょっとはずかしかったけど，喜んでくれたからうれしかった」と書いており，他人のために行動することが自分の喜びだと位置付けることができている。総合単元的な道徳の授業を行うことは，生徒Ａの道徳的価値観の向上に効果的であった。

また，道徳の授業のまとめの場面では，教材提示装置を使って，毎回ねらいに応じた絵本をスクリーンに映して読み聞かせを行った。大画面の絵を見ることで，前を向いてスクリーンに集中させることができ，普段なかなか落ち着きのない生徒も静かに教師の話を聴くことができ，余韻をもって授業を終えることができた。生徒Ａもオオカミが子ブタのために自分の命も顧みず行動する場面では，引き込まれるような表情を見せていた。

３　３年生の実践　　主題「命の尊さを感じよう」

(1)　ねらい

多くの人の愛情や願いが１つの命を支えていることに気付き，命の重さを実感するとともに，自他の生命を尊重していこうとする気持ちを高める。

(2)　授業の展開【ＱＵ結果分析，他教科と関連したワークシート分析】

２回実施したＱＵアンケートの中で，表１の結果を示した生徒Ｂについて，他教科との関連を踏まえ，心の変容を追いかけてみた。

	5月	10月
被侵害得点	0.5	8.5
承認得点	−3.5	6.5

表１　生徒ＢのＱＵ結果

生徒Ｂは，6 月に実施した道徳授業「裏庭での出来事」の「価値の内面的な自覚」の段階での発問に対するワークシートに，１行しか記述できなかった。しかし，10 月に行った理科の授業でのアンケートでは，次のように生命について考えている。「その命をむだにしたら，絶対にダメだと思いました。だから，生き物すべて大切に育てないといけないんだと分かりました」また，11 月に実施した道徳「命の重さ」（3－(1) 生命の尊重）の授業で，「価値の内面的な自覚」の発問に対するワークシートでも，以下のように生命の尊さについて考えている。「犬が死んじゃったときにすごい悲しかったし，もっと大切にしとけば良かったと思った。すごく大切な存在だったから頭が真っ白になって，命はすごく重いなぁとわかりました」

以上のことから，教科と関連づけられた継続的な道徳の授業が，道徳的価値観の高まりに効果的であったと考える。また，生徒Ｂにおいては，継続的な道徳の授業がＱＵの結果が示す学級での居心地の良さが増した要因の１つだと考えられる。

Ⅱ　研究の成果

１　授業実践を通して

互いのいのちや生き方を見つめるという視点で，総合単元的な道徳の授業を設定し，各学年の目指す生徒像を明確にして実践してきた。その結果，次のような成果が見られた。

・　道徳の授業の指導過程において，生徒の道徳的判断や心情を引き出すために，基本発問や中心発問で，「～と思いますか」という問いかけが，生徒の心情を引き出すのに効果的であった。

・　心のノートの活用について，1 年の全生徒に増し刷りし，プリントを紙ファイルに綴じさせてワークシートと共に道徳ファイルとして利用した。教材提示装置で，心のノートの色合いによる視覚的な効果も示しながら，心情の変化を蓄積させたことで，生徒は自分の内面をより深く洞察することができた。

・　道徳の授業を核として，学活・総合的な学習の時間，行事などを意図的に結びつけて単元構成を工夫して取り組んだことで，人とのかかわりを中心として，生徒の体験活動の中で心の変容を実感できた。また，いのちや生き方にかかわる内容項目に重点化して年間計画に位置づけたことで，自己をじっくりと見つめる機会を保障でき，自己の成長を確認することができた。

・　ワークシートやアンケートなど生徒がその時に記述した内容を道徳ファイルに蓄積し，変容をとらえられるようにしたことで，生徒は価値観の高まりを容易に把握することができた。

２　ＱＵアンケートの結果より

人とのかかわりを大切にしていくためには，生徒の実態を把握して集団生活の中での今の位置づけを教師も把握しておく必要がある。また，実践を通して，生徒の心の居場所が，どう変わったかを客観的にとらえていくことも，今後の実践に生かしていけると考える。

5 月・10 月の 2 回実施したＱＵの結果は，教師の日常観察での把握を裏付ける結果となった。また，多くの学級で，不満足群・要支援群に所属する生徒が，満足群へと望ましい方向への変容が見られたことも確認できた。